

セルバンテス作、牛島信明訳「ドン・キホーテ前篇(3)」岩波文庫、岩波書店 2001年2月16日刊を読む

## 遍歴の騎士とは

1. 一番の上座には、しきりに辞退はしたものの、結局ドン・キホーテが着くことになった。すると彼は、自分の隣りにミコミコーナ姫が座ることを望んだ。自分は姫の庇護者だからというのであった。次いでルシンダとソライダが着席し、この二人の向かい側にドン・フェルナンドとカルデニオが席を占めた。それから《捕虜》とほかの紳士たちが続き、夫人たちの側には、司祭と床屋が連なっていた。こうして一同は上機嫌で、楽しい食事を始めたが、しばらくしてドン・キホーテが食べるのをやめ、かつて山羊飼いたちと夕食をともにした折りに長広舌をふるいたくなかったのと同様の衝動にかられて、次のような演説をぶちだした頃には、その場の興趣はいっそう盛りあがったのである—
2. (1)親愛なる皆さん、つらつら考えてみますと、遍歴の騎士道に従事する者は、まことに前代未聞の驚嘆すべき事実にめぐりあうものでござる。  
(2)まったくの話、この世に生きる者のいったい誰が、今この城の門を入れてきて、われわれがこうして集まっているのを見たときに、われわれがいかなる人物であるを推測し、判断することができましようか？  
(3)拙者の横に座っておられる方が、われわれのひとしく存じあげておる偉大な女王であり、また拙者が天下にその名も高き《愁い顔の騎士》であると、いったい誰が言いあてることができましようぞ？  
(4)こうなってはもはや、遍歴の騎士道の実践こそ、人類が考え出したあらゆる営為に優るものであることに疑問の余地はなく、しかもそれがほかの何にもまして危険にさらされているがゆえに、それだけいっそう高い評価に値するのでござる。
3. (1)そもそも武術より文芸のほうが優れているなどとのたまう御仁は、拙者の前から立ちのかれるがよい。  
(2)そうした御仁は、それがいかなる人物であろうと、自分の口にしていくことがまるで分かっていない徒輩と断じて、拙者、いっこうにはばからぬからでござる。  
(3)彼らが拗りどころとして、つねに声高に唱える論理というのは、精神の営為は肉体のそれに優り、武事はただただ肉体をもってなされるというものであるが、これではまるで武勇の実践は体力のほか何も必要とせぬ類の肉体労働と選ぶところがないと言わんばかりだし、われわれ騎士道を奉ずる者が武術と呼ぶところのものの中には、大きな理性のはたらきによってはじめて可能となる勇敢な行為など含まれていないと申すようなものじゃ。  
(4)さらに言えば、一軍を率いる武將、あるいは包圍された都城の防衛にあたる武將の意気と働きが、肉体のみならず精神によっても左右されるという事実を否定するような言い分でござろう。

(5)そうではないと言われるなら、敵のねらい、計略、戦術、落とし穴などを察知したり、はたまた味方の損害を未然に防いだり、それに対処する策を立てたりすることが、肉体の力のよくするところかどうか考えてごらんなされ。

(6)それらはすべて精神のはたらきによるものであって、肉体のあずかり知らぬことござる。

4. (1)さて、こうして武にも文と同じく精神のはたらきが必要であることが分かったからには、今度は文武の二つの精神、つまり文人の精神と武人のそのいずれがより有益であるか考えてみましょうぞ。

(2)このことは、それぞれが目指す目的なり到達点なりによって判定することができるでありますよ。

(3)と申すのも、その志と目的が高尚であればあるほど、それだけいっそう尊重されるべきだからでござる。

(4)まず文事が目指す目的あるいは到達点は…と申しても、今ここで神学について論じるつもりはさらさらござらん。神学のねらいは人の魂を天国へと向かわせ導くことであって、そのような限りなく高い目的に肩を並べることなど、何をもってしても不可能ですからな。

(5)したがって、拙者が<sup>あげつち</sup>論うのはいわゆる人文学でして、その目的は賞罰の公正を期し、各人に各人に属するものを与え、よき法律を遵守するように教導するところにある。

(6)なるほど、たしかにこれは<sup>こうまい</sup>高邁にして心豊かな、大きな称賛に値する目的ではある。

(7)しかし、武の使命に与えられるべき称賛には及びもつきませぬ。

(8)なにしろ武事のめざす目的というのは平和であり、これこそこの世で人が求めうる最大の恩恵なのですから。

5. (1)さればこそ、この世界と人類が最初に受けとった福音は、われわれ人間にとっては朝であった夜中に天使たちがもたらしたもので、彼らは空から、「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、<sup>みこころ</sup>御心に<sup>かな</sup>適う人にあれ」と唱えたのでござる。

(2)また天上と地上の無二の師たるキリストが、その<sup>おんちよう</sup>恩寵に浴した十二人の弟子たちに教えた挨拶は、人の家に入ったら、「この家に平和があるように」と言うようにというものであった。

(3)さらに師は何度も弟子たちに、「私の平和を<sup>なんじ</sup>汝らに与えよう」、「私の平和を汝らに<sup>のこ</sup>遺そう」、「平和が汝らとともにあるように」などと、まるで宝石か貴重品でも手ずからお渡しになるかのような調子で仰せられたが、たしかに平和は、それなくしては地上にも天上にも、いかなる幸福も存在しえない宝石と言えましょうぞ。

(4)そして、この平和こそ戦争の真の目的ですから、戦争と武事は実は同じということになりますな。

(5)さて、戦争の目的が平和であって、その点において、文事の目的より優っているというこの真実が認められたとするなら、次に文人の肉体的辛苦と武事にたずさわる者のそれとを比較して、どちらがより難儀かたしかめてみましょうぞ。

6. (1)ドン・キホーテはこのような見事な言辞を駆使し、堂々たる調子で演説を進めたので、そのとき彼の話の聞いていた者の誰ひとりとして、彼を狂人と思うことなどできなかった。

(2)それどころか、その場の聞き手の大半は、もともと武芸を事とする騎士であったので、喜びを覚えながらドン・キホーテの説に耳を傾けていたのである。そして彼はなおも話を続けた一

7. (1) それでは、文事にたずさわる学徒のこうむる辛苦から考えてみますが、何よりもまずあげるべきは貧困でありましょう。
- (2) とはいえ、すべての学徒が貧乏というわけではなく、全体の状況を端的に言い表わしたまでのことをござる。
- (3) まあ、彼らが貧困にあえいでいるとさえ言えば、そのうえ彼らの不幸を強調する必要はありますまい。人貧しゅうしてよきことなし、というわけですね。
- (4) 貧困の形態もさまざま、飢えに苦しむ者、寒さに震えあがる者、衣服を欠いて裸同然の姿をさらす者、さらには、これらすべてに同時に襲われる者といった具合をござる。
- (5) しかしながら、食う物にまったく事欠くというようなことにはならない。
- (6) もっとも世間一般より食事の時間はいささか遅れ、金持連中の残飯で間に合わせるということになるが。まったくの話、そうした学徒たちにとっての最大の屈辱は、彼らのあいだで《スープ貰い》と呼ばれている食さがしといえましょう。
- (7) それでも、結局のところ、彼らはどこかの家の火鉢なり暖炉なりに近寄ることが出来ます。
- (8) それらが彼らの体を十分に暖めることはないにしても、寒さをしのぐことはできるでありますしょう。
- (9) 要するに、彼らはなんとか夜を屋根の下で過すことができるのでござる。
- (10) そのほかの細かな点、すなわち、シャツが足りないとか、靴のはき替えがないとか、服がすり切れているとか、あるいは、たまたま運よくどこかの饗宴きょうえんにありついて、げんなりするまでがつがつ食るといったようなことにまでは、この際ふれるつもりはござらぬ。
8. (1) 文事にかかわる学徒は、いま申したような険しくも苦難に満ちた道を、ここでつまずき、あそこで転び、起きあがったかと思うとまた倒れながらも歩き続け、ついに望みの地位にまでたどり着く。そうして、いったん高い地位に就いてしまうと、それまで数々の浅瀬やスキラとカリプディスのごとき難所を乗りこえてきた彼らが、まるで幸運の翼に運ばれてきたかのようになる。
- (2) 拙者もそうした学徒を数多く見てきましたのじゃ。肘掛け椅子ひじか いすに座ったまま世界を治め、天下に号令する彼らは、かつての飢えを飽食に、打ち震えた寒さを心地よい涼しさに、すり切れた衣服を盛装に、身を包んで寝たむしろを上等のリンネルと緞子どんすに変えてしまうのでござるが、それも彼らの徳行に値する、しかるべき報償といえるであろう。
- (3) しかしながら、彼らの労苦も、それを戦士の労苦と並べて比較してみれば、あらゆる点で、とうてい及ぶべくもない。次に、そのことについて述べることにいたそう。

P.68 ~ 71

<コメント>

今年 2016 年に没後 400 年となったスペインの巨匠、セルバンテス作の「ドン・キホーテ」全 6 冊の 3 冊目からの引用。この文章を読む限り、とても 400 年前の議論とは思えないほど新鮮だ。まだ「ドン・キホーテ」を通読なさっておられない方は、少しずつでも時間をかけて是非お読みください。